

# English: Free from Despair 絶望するのは早すぎる

TMメソッドによる英語上達法

寺島 隆吉

誰でも英会話がすらすら出来るようになりたいと思っています。しかしどうすれば英会話が出来るようになるのでしょうか。

巷ちまたにはいろいろな会話の本が出版されていますし、英会話学校も大流行です。にもかかわらず日本人は英語が出来ないと言われていました。

これは何故でしょうか。それは出版されている英会話の本や会話学校の教科書に問題があるからです。では、その会話本のどこに問題があるのでしょうか。以下に詳しく説明します。

巷ちまたに溢あふれれている会話のテキストは、ほとんど全てが暗記中心なのです。「空港で」とか「レストランで」とかいう場面設定で会話が構成され、そのフレーズを憶えることが会話学習の中心になっています。

しかし実際の場面では、習ったフレーズどおりに会話が進行することは、むしろ希です。「空港」の入国手続きのように特定の時間と空間なら会話の出だしだけは教科書どおりということはあるかも知れませんが、日常会話は決して教科書どおりには進行しません。

これは日本語でおこなう日常会話を考えてみれば直ぐ分かることです。もし日本語でおこなう日常会話が教科書どおりに進んだとしたら（日常会話に教科書があるとすれば、の話ですが）その会話は非常に奇妙なものか無味乾燥で実に面白くないものに違いありません。

「せめて日常会話ぐらいは出来るようになりたい」という要求を良く耳にしますが、日常会話というのは相手によっても周りの雰囲気によっても話題が常に変化するからこそ日常会話というのです。ですから決まったフレーズを暗記する会話学習では永遠に英会話が出来ようにはなりません。

では、どうすればよいのでしょうか。その秘訣は英

作文にあります。というのは、言いたいことが頭に浮かんだ時、それを頭の中で英作文して易しい英語で言えるようになれば、どんなに話題が変化しても会話を持続することが出来るからです。会話が持続するためには流暢な英語である必要はないのです。

これは日本に来た外国人が私たちに日本語で話しかけてきた場合を考えてみれば、直ぐに理解できることではないでしょうか。私たちは相手が日本語で話しかけてきただけでも驚いたり感心したりして、相手の外国人に流暢な日本語を要求したりはしないはずで

それどころか、日本語として少々おかしなところがあっても前後の文脈から判断して相手の言いたいことを推測しながら会話を進めようとするのではないのでしょうか。文法的に変なところや間違ったところがあっても、一々その間違いを訂正して会話の進行を妨げることは、普通はしないでしょ

同じことが英会話でも言えるはずで

前後関係や身振りの助けを得ながら、自分の言っていることが何とか相手に通じる英語であれば、文法的に少々まちがった英語であっても、相手に理解してもらえますし、会話は持続します。問題は「通じる英語」の土台は何かということです。

本書では、イソップ物語の英訳練習を通じて、この「通じる英語の土台作り」のお手伝いしたいと思います。「通じる英語の土台」とは何かについては、章を改めて説明するつもりですので、ここでは何故イソップを教材にするかということだけを述べておきたいと思います。

というのは、イソップ物語は短いながらもピリっとした風刺が効いていて大人が読んでも尽きせぬ内容を持っているからです。というよりもギリシャ時代の奴隷であったイソップは、この寓話を実は子供のためではなく大人のために作ったのでした。「やり直しの英語」教材として最適だと思う理由です。

最近の言語習得研究によれば「苦行道」によって学習した内容は脳に定着しません。楽しみながら学習したものだけが脳に定着するのです。つまり「易行道」こそ学習の本道であり、また持続可能な学習法なのです。外国語の習得は一朝一夕には行きません。だからこそ「易行道」が必須なのです。

学習を楽しくするためには幾つかの要因がありますが、先ず第1に大切なのは教材が読んでいても面白く、

かつ何か考えさせる内容を持っていることです。ところが従来の外国語学習というと、会話のフレーズを暗記することが主たる作業になり、暗記しなければならない量に絶望させられて沈没してしまうテキストが圧倒的です。

しかも「やり直しの英語」という場合、しばしば教材の内容が小学生高学年程度であることが少なくないのです。その上、暗記しなければならないフレーズの内容に統一性が無く、個々バラバラのセンテンスを憶えなければならないため、「苦行道」の度合いが一層強くなります。

本格的に英語学習を始める中学生ですら国語教科書で読んでいる内容は夏目漱石や芥川龍之介など極めて高度な内容です。ところが英語学習になったとたんに小学生の内容になってしまったのでは学習意欲が半減します。最初はゲーム感覚で楽しんでいたとしても、そのような学習は決して持続しません。だとしたら、成人の場合、なおさらのことです。

その点、イソップ物語は既に述べたように一つ一つが深い内容を持ち、大人が読んでも飽きさせない魅力を備えています。それどころか大人が読んで初めてイソップが意図したことを理解できると言っても良いくらいです。しかも、長さも作文練習に手頃です。いくら内容があっても余りにも長い教材では、英語の作文練習としては「苦行道」に転化してしまうからです。

そんなわけでイソップ物語を教材にしたのですが、この本では「丸」「四角」「括弧」の三つの記号を使って作文練習をします。この三つの記号だけで英文の構造を視覚的に浮き彫りになり、文法用語を使わなくても英語の読み書きが出来るようになるからです。「通じる英語」の土台が、この本を読むだけで習得できるように工夫されているのです。

この方法は筆者が高校教師の時代に生徒と格闘しながら編み出したものです。しかも、この方法は筆者が1986年に大学教師になってからは全国の中学・高校・大学によって追試され、その効果が確認されているものです。今では高専のドイツ語教授にまで応用されているほどです。つまり、この方法は既に20年にもわたる実践の蓄積があり、試され<sup>ため</sup>済みの方法なのです。<sup>たま</sup>騙されたと思ってやってみてください。

以上で私は、頭の中で英作文ができるようになれば会話が出来ようになるし、そのためには内容のある

教材で作文練習するのがベストだと述べてきました。つまり「聞くのは相手のスピードで」「話すのは自分のスピードで」というのが英会話を成立させ持続させる基本的原則だということです。要するに自分が話すときは、ゆっくり頭の中で英作文しながら自分のスピードで話せば良いにです。

しかし、ここで注意して欲しいのは、「話すのは自分のスピードで」というのは英会話を成立させ持続させる必要条件であって十分条件ではないという点です。というのは「聞くのは相手のスピードで」という条件が欠けているからです。相手の言っていることが分からなければ、いくら自分の言いたいことがあっても会話はそれ以上進展しません。

もちろん相手の話す英語が早すぎて聞き取れないことがあります。その場合には「もっとゆっくり話して下さい」と要求することは出来ます。しかし誰でも経験していることだと思うのですが、余りにも聞き取れない量が多すぎる場合、毎回毎回「もっとゆっくり話して下さい」と要求するのは、気が引けてとても出来ないものです。

ですから英会話が出来ようになるためには、「聞けるようになる」ための別の訓練が必要になります。では何故<sup>なぜ</sup>私たちに英語の聞き取りが難しく感じられるのでしょうか。その理由の第1は音声は瞬間的に消えていくという点にあります。文字なら分からない文の意味を立ち止まって考えたり単語の意味を辞書で調べたりすることは出来ますが音声はそうはいきません。

つまり瞬間的に消えていかないう文字・文章ですら直読直解できない学力では、最初から英語の聞き取りは無理なのです。ではどうすれば英文の直読直解が出来るようになるのでしょうか。その方法も実は既に開発されていて20年もの実践を積み重ねてきています。しかし、この本でそれを説明するゆとりはありません。近いうちに別の本でゆっくり説明する予定です。

ところで、直読直解ができるようになったら「聞ける」ようになるのでしょうか。実は残念ながらそうはいかないのです。というのは英語の音声は文章になると単語ひとつひとつの発音とは違ったものになるからです。これを同時通訳で有名な國弘正雄さんは「音の化学変化」と呼んでいます。これを習得しないと直読直解が出来ようになったとしても「聞ける」ようにはなりません。

このように外国語の習得は多面的な側面を持ってい

ます。だからこそ外国語の習得には時間がかかり、楽しみながら持続できる「易行道」でないとならないのです。日本人の好きな根性主義や「苦行道」では、よほど意志の強いひとか「通訳になりたい」などという目的意識がはっきりしているひと以外は、<sup>ま</sup>先ず英会話が出来ようにならないでしょう。「せめて日常会話ぐらいは出来るようになりたい」という動機ぐらいでは、「苦行道」は絶対に長続きしないのです。

このように考えてくると、日本で英語教育が余り成功しなかったのは当然とも言えるのです。なぜなら日本で実践されている英語教育のほとんどは、「苦行道」「根性主義」に基づいているか、英米国で移民を対象として研究されてきた英語教育の方法を日本の学習環境を無視して直輸入されている場合がほとんどだからです。

しかし、既に述べてきたように、私たちの研究会は全く別の方向を目指してきました。日本の風土に根ざした「易行道」を研究の根底に据えてきたからです。ですから英語における「音の化学変化」を習得させる方法も独自のやり方を開発し、既に目に見える成果を上げてきています。その方法も、この本で詳述し練習して貰うことは無理なので別の機会にしたいと思っています。

前置きが長くなりました。では次章から早速、イソップ物語を教材に、英作文が楽に出来る方法の練習に入りましょう。

2004年4月1日

蛇足になりますが、私たちの研究会では読み書きの訓練にも音声の訓練にも「丸」「四角」「括弧」の三つの記号を使います。これらの記号は、私が組織している英語教育研究会の内部では、しばしば「寺島記号」と呼ばれています。

しかし本書では、簡略化のため「寺島記号」をTM (Terasima's Marker) と略記し、私たちの20年にもわたる研究成果・英語教育の方法をTMメソッドと呼ばせていただきたいと思えます。その方が今後の叙述に便利だからです。

個人名<sup>あ</sup>を或る教育方法に冠することは後世のひとがすることであって、創始者が存命中にそんなことをするのは不遜の誹り<sup>そし</sup>を免れ<sup>まぬ</sup>ないのですが、今後に出される予定の教材シリーズをまとめて呼ぶのに便利ですので、どうか御海容<sup>ごかいよう</sup>のほど、お願い申し上げます。

## 1章 なぜ間違った英語でも良いのか

さて「序章」では英会話が巧くなるためには会話学校へ行くよりも英作文の能力を高める方が近道だということ<sup>を</sup>を述べました。では、どうすれば英語で簡単に作文が出来ようになるのでしょうか。

ふつう英作文が出来ようになるためには、難しく細かい文法と沢山の語彙・文型を憶えなければならぬと考えられています。しかし、少々、文法的にはおかしい英文でも十分に会話は可能ですし通じる英語になります。

たとえば日本に來ている留學生が次のように言ったとします。

A：日本に來てどうですか。一人でさびしいですか。

B：いいえ。さびしいですじゃないです。

A：毎日、国に電話をかけますか。

B：毎日？そんなにかけるじゃないよ。1ヶ月に1回くらいかな。

A：いま住んでいるところはどこですか。

B：いま留學生會館で住んでいます。

A：あなたの大学では、ラオスの留學生は多いですか。

B：ラオスの留學生は多いくないです。

A：春休みは、どこかへ行きますか。

B：旅行へ行くだと思います。

この会話は『日本語に生かす第二言語習得研究』(迫田玖美子、アルク、2002)から文例を拾い上げて、会話になるように繋ぎ合わせたものです。

下線部を見れば分かるように日本語としては明らかに不自然です。でも会話としては十分に成立しています。このような会話が出来れば日本の何処へ行こうと旅行は出来るのではないのでしょうか。

ところが日本人は間違いを恐れて、このような会話すら出来ない人が多いのではないのでしょうか。というよりも、上記のような「細部に間違いがあっても通じる英語」を書いたり言ったりすることができないのではないのでしょうか。

それに輪をかけて事態を悪化させているのが「英米人は、そんな言い方はしない」という英会話の本が氾濫していたり、テレビで「そんな言い方をすると英米人に笑われる」という番組が横行していることです。そのくせ、英米人が間違いだらけの日本語を話しても「日本語が巧いですね！」と驚嘆するのです。

このような状況では、日本人の英会話が上達するはずがありません。上記で紹介した『日本語に生かす第二言語習得研究』にも書かれていることですが、外国語を習得するときに間違いをおかしながら上達していくのです。しかも最近の研究では「どんな順序でどんな間違いを犯しながら上達していくのか」も分かっているのです。

たとえ教室で文法を学び試験で合格点を取っても、いざ会話になると実に単純な文法ミスをおかしてしまうのです。たとえば "Did you go to Tokyo yesterday?" という単純な質問に対しても、最初のうちは "No, I went not to Tokyo yesterday." と答えてしまうのが普通です。それどころか "No, I goed not to Tokyo yesterday." と答えてしまうことすらあります。

そして、このような間違いをしながら外国語が上達していくし、そのような間違いをせずに外国語が上達することはあり得ない、というのが最近の研究成果なのです。このような研究を「第二言語習得研究」の中でも特に「言語習得順序の研究」というのですが、もともとは「第一言語習得研究」から出発したものでした。

「第一言語」というのは「生まれたときから母親を通じて習得した言語」(「母語」と「母国語」は厳密に言うと違うのですが、ここでは便宜上、区別しないで話を進めます)を指すのですが、その「習得順序は一定である」という研究成果が先にあり、その刺激を受けて発達したのが「第二言語習得研究」でした。つまり「母語」「母国語」ですら、間違いをおかさずに発達することはあり得ないのです。

このように「母語」ですら間違いを置かし犯しながら発達していくのですから、ましてや外国語は当然のことです。ところが既に述べたように日本では、市販されている英会話の本であれテレビ番組であれ、「日本人はこんな間違いをする」という情報で満ちあふれているのです。これでは間違いをおかしながらノビノビと英語を学習していくことは、とてもできません。

そこで、この本では先ず皆さんの発想を転換して欲しいと思うのです。要するに「間違った英語で何が悪い」という姿勢を持って欲しいと言うことです。「間違っているけど基本的に通じればよい」という楽天的な姿勢で英語学習をして欲しいということです。そうで

ないと学習は持続しないからです。外国語の習得は一朝一夕には完成しません。ですから持続できない学習法は決して良い学習とは言えないのです。

それに細かな枝葉の間違いは徐々に直していけばよいのです。また上達するに連れて間違いは自然と訂正されていくものです。もちろん「化石化」といって、細かな間違いが定着してしまうことがあります。これは「言語習得研究」が明らかにしているように、「通じるから自分の英語はこの程度でいいや」と進歩と向上を怠った場合に起きます。しかし、それはそれで結構ではないかと思うのです。

というのは、私たちは日本に滞在している外国人に日本人並みの日本語力を要求するでしょうか。もちろん、仕事や研究のために専門として日本語を学習しているひとは日本語をきちんと読み取る能力は必要でしょう。でも、そんなひとですら正確な日本語を話せる人はそれほど多くはありませんし、まして正確な日本語を書けるひとはごく希です。私の身近に日本語で著書を出している外国人の教授を知っていますが、良く聞いてみると自分では書いていないのです。(実は奥さんが日本人でした。)

この例で分かるように、普通の外国人が正確な日本語を話したり書いたりすることは、不可能に近いわけですし、私たち日本人も正確な日本語を普通の外国人に期待していないのではないのでしょうか。よく「こんな言い方をすると誤解される」と英会話の本で書かれていたりテレビ番組で言われていますが、日本語で話していても誤解や摩擦は避けられません。それどころか私などは、日本語で話しているにもかかわらず、誤解が原因で家人と摩擦が絶えません。

だとしたら「英語で会話をして誤解が生じるのは当たり前」と考えた方がよいのではないのでしょうか。間違いだらけの英語でも、先の留学生の例のように、基本的なところ(これについては後の章で詳しく説明します)さえ正しければ相手は理解してくれますし、また分からなければ相手が聞き返してくれます。会話の良いところは「対面してして、通じないと思ったら何時でも聞き返せる」という点ではないのでしょうか。間違いだらけでも、とにかく「量」を書き話すことが上達の秘訣です。

私の研究室には毎年、アジアからの留学生が絶えません。しかし1年も経たないうちに何とか日本語で用が足せるようになります。その中でも上達の早い学生

は「量」を話す学生です。何を言っているのか分からないのですが、とにかく「量」を話すのです。こちらは相手が言いたいことはこういうことだろうと推測しながら受け答えをしてやります。すると不思議なことに、だんだん分かる日本語になってきます。しかし間違いを恐れて「量」を話さない留学生は1年経っても目に見える進歩が余り見られません。

ですから何度も言うように、間違いを恐れずノビノビと学習することがまず重要だと思います。「英米人はそんな言い方をしない」などという会話本やテレビ番組は余り見ないようにしましょう。当面は日本人の発想でよいから、たくさん書きたくさん話せばよいのです。「英米人はそんな言い方をしない」などという会話本やテレビ番組は、読めば読むほど、見れば見るほど元気がなくなり、学習意欲を減退させます。楽しみながら学習するのが最良の学習法なのです。

既に序章でも述べたことですが、日本人は「苦行道」が好きですから、何か苦しみながら学習していないと学習していないと思う傾向があるようです。しかしアメリカで言語習得を研究している学者・クラッシェンは「アフェクティブ・フィルター」(情意障壁)という仮説を出しています。これは「緊張や恐怖におびえながら学習していても学習した内容は脳に定着しない。したがって教授・学習は「情意障壁」が低く薄い環境でこそ最上の効果を得ることが出来る」というものです。

これは、有名な「サジェストペディア」などの教授法からヒントを得て提出された仮説です。特に、この教授法はブルガリアのソフィア大学医学部で精神医学・神経学・生理学を専攻したロザノフ博士によって開発されたものですが、クラシック音楽を聞きながら思い切り心身を解放しつつ外国語学習をすすめるものです。その効果は目覚ましいものがあり、ブルガリア内外で外国語教育や小学校教育に取り入れられただけでなく、1979年にはユネスコでその研究成果を発表し、新しい優れた教育実践方法として採択されています。

話が少し横道に逸れた<sup>そ</sup>かも知れませんが、要するに私が言いたかったことは、枝葉の間違いがあっても良いから、幹の部分で「通じる英語」を「多く書き」「多く話そう」ということなのです。私の教えている大学生ですら、提出したレポートを読んでいると意味不明であることが少なくないのです。まして外国語であれ

ば間違っても当然なのです。だとすれば、次の問題は「幹の部分で」「通じる英語」とはどんな英語なのか、どうすればそんな英語が書けるようになるかということになります。

そこで章を改めて、この点について詳しく説明したいと思いますが、その前にもう一つだけエピソードを紹介しておきたいと思います。というのは、私がまだ高校教師だった頃、高校生を連れて初めてアメリカを訪問し、1ヶ月近くホームステイした時のことです。そのとき地元の高校生が書いたノートを見せて貰ったことがあるのですが、それを読んで驚いたのは、余りにも文法的な誤りが多いということでした。外国人の私が見ても分かる間違いが多かったのです。

だとしたら私たち日本人が間違った英語を書いたからといって何をそんなに恥じる必要があるのでしょうか。それどころか、英米人だからといって、自分の書いたものを彼らに添削して貰うと、逆に誤りを拡大再生産する可能性すらあるのです。ところが既に何度も述べたように「英米人はそんな言い方をしない」という言説が<sup>まわ</sup>周りに余りにも多いのです。それが日本人の英語学習を逆に阻害しているのではないかと私には思われるのです。ですから、もっとノビノビと気楽に英語を学習しようではありませんか。

## 第2章 なぜ私たちは英語が書けないのか

第1章では、「細かなところでは間違っている、基本的なところでは伝えたいメッセージが伝わる英語」を目指します。このような英語が書けるようになれば、後は自由に会話が出来ようになります。

なぜなら、先に紹介した留学生の日本語を思い浮かべれば直ぐ分かるように、ゆっくりと頭の中で英作文をしながら話せば、相手は必ず理解してくれますし、分からなければ聞き返してくれます。何度も述べているように、枝葉が間違っている相手は推測しながら聞いてくれるからです。

たとえば、先に紹介した『日本語に生かす第二言語習得研究』では次のような例が載っています。留学生がレストランで食事をして家に帰ったのですが、かばんの中にサイフがないことに気づき、サイフのことを尋ねる場面です。お金をはらうときに近くのテーブルにかばんを置いたことを思い出しながら尋ねています。

店のひと「もしもし、レストランABCです。」

留学生「あー、私は、ごめんなさい、私は、この前、あなたのレストランで、あー、料理食べました、この後、私の財布は、ここで、払って、帰りました、ちょっと、見て、ごめんなさい、あー。」

店のひと「えーと、財布ですか？」

留学生「はい、財布です。」

店のひと「その財布をどこに忘れたのかわかりますか。」

留学生「あー、このcashierいるのテーブルの、近くのテーブル、ちょっと見てください。(中略) あ、右の、あー、初めて、あー、テーブルです。」

この留学生は自分で電話をかけて財布のことについて尋ねることが出来るのですから、かなり日本語の力があると考えてよいと思います。日本人が海外旅行に出かけてレストランに忘れ物をしたとき、それについて電話で尋ねる力があるひとは果たしてどの位いるのでしょうか。面と向かって会話をするのと比べて、電話の会話は、相手の表情が見えなかったり良く聞き取れなかったり、非常に難しいものだからです。

ですから、この留学生は中級の日本語話者だと考えて良いと思います。上記の本でも「母語ヒンドゥー語：中級」という註が付けられています。このように日本語の会話力が中級の留学生でも上記に見るとおり枝葉の間違いが散見されます。たとえば、「この後、私の財布は、ここで、払って、帰りました」と言っている

ますが、私たちは言っていることの基本は理解できるのではないのでしょうか。

たとえば、下線部の「この後」「ここで」は「その後」「そこで」とすべきです。面と向かってレジ係の人と話しているのであれば「ここで」でも良いのですが、いま電話で話しているのですから、「そこで」とすべきだからです。また「この後」も「その後」にしないと時間の指示としては間違いでしょう。でも店のひとはそんなことには気にもかけず、「えーと、財布ですか？」と対応しています。これは会話が成立している証拠です。

上記の会話には他にも私が下線部を引いたところを見れば分かるように細かな間違いが少なくありません。でも聞き手は話し手の意図を推測しつつ会話を進行させています。しかも、これが中級日本語会話の実態なのです。ですから私たち日本人も誤りを気にせず、先ずこの程度の英会話ができることを目指すべきではないのでしょうか。現在の日本に溢れているのは完璧主義の英会話です。これでは誤りを恐れる恐怖感ばかりが先行し、決して会話力は向上しません。

では「枝葉の間違いを気にせず幹だけが正しい英語」というのは、どのような英語であり、それはどうすれば習得できるのでしょうか。それを知ってもらうのが本書の目的でした。ですから長い前置きはこれくらいにして、そろそろ具体例でそれを説明していきたいと思えます。

例文は「序章」でも述べておいたように、イソップ物語から採ります。というのはイソップ物語は短いにもかかわらず深い含蓄があり、練習問題としては最適だと思うからです。

これを英語に出来れば他のどんなことも英語で言えるようになるでしょう。と言っても、この例文を「間違いのない正しい英文にする」訓練を目指すわけではありません。イソップ物語を教材に、英語の幹だけを習得してもらうつもりなのです。

ですから極端に言えば、最初は英単語を憶える必要すらないと考えています。なぜなら先ず第1に必要なのは「単語さえ知っていれば英文の幹は簡単なのだ」ということを実感してもらうことだからです。

「なぜ今のところ単語力は必要ないのか」「では単語力は何時どのように身につければよいのか」などについては徐々に説明していきます。論より証拠。例文で考えていくことにします。

教材は先ほども述べたようにイソップ物語ですが、その中でも「羊飼いの悪戯(いたずら)」を例文に取り上げることになります。

この話は本書で取り上げる予定のイソップ物語10話の中でも長いものに属するのですが、これを英訳できれば残りの9話も簡単に英訳できるようになると考えられます。

また話の内容も、日本では「オオカミと羊飼いの少年」として有名ですから誰でも知っているものだと思いますが、現在の世相を考えると、この寓話には「嘘についてはならない」という単なるお説教を越えた風刺が込められている、と私には思われるからです。

どうせ英訳に挑戦するのであれば、訳し終わった後で何か心に残るものであって欲しいと考えるのです。さもないと単なる作業だけに終わってしまって、学習の楽しさが半減してしまい、学習意欲が持続しないからです。

では、「この話から何を読み取るのか」ということになりませんが、それは後の楽しみということで、さっそく話を次に引用します。

羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。しばらくして、狼がきたので、子供は「来てください。狼だ。」と叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。そこで狼は安心して、楽に羊をみんな殺してしまいました。

和訳の原文は岩波少年文庫『イソップのお話』(編訳・河野与一、1955)から採りました。題名は「嘘つきの子供」となっています。原文は子ども向けに平仮名ばかりだったのですが、かえって読みにくいので、漢字に直したほうがよいと思われるものは漢字に変えてあります。そこで、これを英訳するのですが、その前に考えて欲しいことがあります。それは、この同じ原典から訳したはずなのに、その和訳に様々な変異があるということです。

たとえば岩波文庫『イソップ寓話集』(訳・中務哲郎、1999)では、同じ話が「羊飼いの悪戯」と題され、次のような和訳になっています。

羊飼いが羊の群を村から遠く追って行きながら、いつもこんな悪さをした。大声で村の人に助けを求めては、狼が羊を襲いに來た、と言ったのだ。二度三度は村人たちも慌てて飛び出して来て、やがて笑いものにされて戻って行ったが、とうとう本当に狼が来てしまった。羊の群が分断され、羊飼いは助けを求めて叫んだが、村人はまたいつもの悪さだと思って、気にもかけなかった。こうして羊飼いは羊を失ってしまった。

河野訳では「です・ます調」だったものが、ここでは「である調」になっているだけでなく、<羊飼いが羊の群を村から遠く追って行きながら、いつもこんな悪さをした>という冒頭文が付け加えられています。もちろん、これ以外にも文の細部に細かな違いが少なくありません。しかし述べられている話の「幹」に基本的な相違はありません。

同じことは中公文庫『新訳・イソップ寓話集』(訳・塚崎幹夫、1987)についても言えます。それは次のようになっていました。

悪ふざけをする羊飼いは、村からかなり離れたところまで群れを連れて行く羊飼いがいたが、いつもつぎのようないたずらをして喜んでいた。オオカミが羊を襲っていると叫びながら、助けを求めて村に住んでいる人たちを呼ぶのである。二度か三度、村の人たちは驚いて大急ぎで出て行った。そして、だまされて引き返した。しかし、最後に、オオカミがほんとうに現われるということが起こった。オオカミが群れを荒らしているあいだ、羊飼いは村人たちに助けを求め続けた。しかし、彼らは羊飼いがいつものようにふざけているのだと考えて、だれもほとんど彼のことを気にかけることがなかった。こうして彼は羊をすべて失ってしまうことになった。

このように、同じ原典から訳したはずなのに、和訳には訳したひとの個性が反映され、様々な変異が生じています。このことを逆に考えると、同じ和文を英訳しても、その英訳には正解がないということです。要するに、自分の個性や力量に応じて多様に英訳して良いということです。問題は言いたいことの骨子が相手に伝わるかどうかということなのです。これは一見す

ると当然のこのように思われるかも知れませんが、そうではありません。

というのは、学校で英作文の授業があると、たいていの場合、「この英訳には、これこれの文型を使いなさい」とか「この英訳には、これこれの熟語・言い回しを使いなさい」と指示があるのが普通だからです。ですから、そういう授業や教科書で英作文を習ってきたものには、与えられた和文の英訳には、それにふさわしい正解があるに違いないという思いこみがあり、自由に英訳してよいという発想が出てこないのです。こうして自縄自縛に<sup>しじょうじばく</sup> 陥り<sup>おちい</sup>書けなくなってしまうのです。

しかし「この日本語には、この英語しか使えない」という思いこみから脱却すれば、自由に書けるようになります。というよりも、この日本語では英語にしにくいと感じた場合、それを英訳しやすい日本語に変えればよいのです。

たとえば、上記のイソップの場合、中務訳では冒頭文が下記の(1)となっていました。ところが塚崎訳では(2)となっています。

(1) 羊飼いが羊の群を村から遠く追って行きながら、いつもこんな悪さをした

(2) 村からかなり離れたところまで群れを連れて行く羊飼いがいたが、いつも次のようないたずらをして喜んでいました。

だとすれば、(1)の下線部が英語にしにくいと思えば、それを(2)の下線部のように言い換えながら英訳すればよいということになります。これでもまだ英訳するのに難しいと思えば、(3)のように二文に分解すればよいのです。

(3) 村からかなり離れたところまで群れを連れて行く羊飼いがいた。その羊飼いは、いつも次のようないたずらをして喜んでいました。

さらにまた、(3)の下線部も難しいとなれば、(4)のように三文に分割して英訳するという発想に立てば、もっと英語で書くことが容易になります。

(4) 羊飼いがいた。その羊飼いは、いつも村からかなり離れたところまで群れを連れて行った。そして、いつも次のようないたずらをして喜んでいました。

それどころか、この冒頭文は話の本筋と関係がないと思えば、この冒頭文を省略し、(5)のように短縮して英訳してもよいわけです。事実、河野訳はそうになっていました。

(5) 羊飼いがいた。いつも次のようないたずらをして喜んでいました。

つまり、いつも一文の日本語は一文の英語にしなければならないと考えるから、英語が書けなくなるのです。思っていることを全て英語にしようと思うから英語で書けなくなったり英語を話せなくなるのです。日本語ですら自分の思いを相手に巧く伝えることが出来ずに誤解や摩擦が生じるのですから、英語で全てを伝えることが出来ないのは当然なのです。

要するに、この章で私が言いたかったことは次のとおりです。

1 日本語を話す留学生のように、文法的に少しぐらい変でも、通じる英語を書いたり話したり出来るようにしよう。

2 頭に浮かんだ日本語を、そのまま全て英語にしようとするのは止めよう。言いたいことが基本的に伝わればよいのだから。

3 英語の単語・熟語を憶えることよりも、言いたいことが頭に浮かんだら、それを易しい日本語に言い換える練習を優先しよう。その方が結局は英会話上達の近道だ。

またまた前置きが長くなりましたが、このような「日本語を日本語に言い換える」練習教材としてイソップ物語を使おうというのが本書の趣旨なのです。その一端は既に紹介しましたが、章を改めて、いよいよ本格的にその練習に入ることにしたいと思います。



### 第3章 どうすれば英語にできる日本語になるか

先の第2章では「英訳は自分の力量に合わせて自由にしていよのだ」ということを述べました。そこで、いよいよ本章では実例にそって、もっと具体的に、そのことを説明したいと思います。例として先に紹介した「嘘つきの子供」(岩波少年文庫『イソップのお話』)を取り上げます。その話は次のようなものでした。

これを英訳するわけですが、最初の文(1)で早速

羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。しばらくして、狼がきたので、子供は「来てください。狼だ。」と叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。そこで狼は安心して、楽に羊をみんな殺してしまいました。

つまづいてしまいます。というのは、下線部を、どのように英訳したらよいかで困ってしまうからです。

(1) 羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。『助けて。狼がきた。』

この下線部は、「まるで...のように」を表現する特別な文法や特別な構文を知っていれば簡単に英訳できるかも知れませんが、そうでないと、これをどう表現してよいか途方にくらせてしまいます。

そこで第2章で紹介した岩波文庫『イソップ寓話集』や中公文庫『新訳・イソップ寓話集』の和訳と比べてみましょう。すると同じ部分が次のような日本語になっています。

(2) 羊飼が羊の群を村から遠く追って行きながら、いつもこんな悪さをした。大声で村の人に助けを求めては、狼が羊を襲いに来た、と言ったのだ。(岩波文庫)

(3) 村からかなり離れたところまで群れを連れて行く羊飼がいたが、いつも次のような悪戯をして喜んでいて。オオカミが羊を襲っていると叫びながら、助けを求めて村に住んでいる人たちを呼ぶのである。(中公文庫)

こうしてみると、岩波少年文庫(以下「少年文庫」と略記)では、「羊の番をしていた子供」となっていますが、これは児童図書用に「羊の番をしていた子供」としたのであって、原文は「羊飼<sup>ひつじかい</sup>」だったことが分かります。

また、逆に(2)や(3)の下線部は、この寓話<sup>くわ</sup>の主題を伝える上で欠かすことの出来ない情報ではないことに気がつきます。

なぜなら、もしそうであれば「少年文庫版」でそれを省略するはずがないからです。だから前にも述べたように、面倒だと思えば思い切って省略して英訳してもよいわけです。

これは、「いつもこんな悪さをした。(岩波文庫)」と「いつも次のような悪戯<sup>いたずら</sup>をして喜んでいて。(中公文庫)」を比較してみても明らかでしょう。

「中公文庫」では下線部の「喜んでいて」が省略されています。ですから、既に何度も述べているように、全ての情報が原文どおりに翻訳されているわけではありませんし、また目的によっては、その必要もないわけですから。

専門家の翻訳ですらこうなのですから私たち素人はもっと気楽に考えて良いのです。

このように考えてくると、冒頭文(1)は次のように言い換えて英訳してよいことが分かります。

(4) [むかし]羊飼(の子供)がいた。いつも(次のような)悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。

こうすれば、下記の(5)(6)のような複雑な文を英訳する作業も避けることが出来ますし、「まるで...ように」を表す特別な文法や構文を知らなくても英語にできます。

さらにまた、(5)(6)と(7)を比較すれば、(7)だけでほぼ同じ意味を表せることは誰にでも納得でき

るのではないのでしょうか。

(5) 大声で村の人に助けを求めては、狼が羊を襲いに来た、と言ったのだ。(岩波文庫)

(6) オオカミが羊を襲っていると叫びながら、助けを求めて村に住んでいる人たちを呼ぶのである。(中公文庫)

(7) 『助けて、狼が来た』と村人を呼ぶのだ。(改作版)

上記の(5)では「大声で」とありますが、(6)ではそれがありません。ですから、これも省略しました。

また「村のひと(岩波文庫)」「村に住んでいる人たち(中公文庫)」も「村人」「the villagers」と一語で済みます。

ここまで来れば、次の冒頭文を英訳する準備が整ったこととなります。比較しやすいように改作版も下に並べておきます。

(8) 羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」(少年文庫)

(9) むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。(改作版a)

(10) むかし羊飼の子供がいた。いつも悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。(改作版b)

上記の改作版では最初に「むかし」を補いました。いきなり「羊飼(の子供)がいた。」だけで始まったのでは、余りにも唐突すぎるので、昔話の始まりと同じように「むかし」を補ったわけです。

さらに、「いつも次のような悪さをした。」にあるように、この場合、下線部を付けてあるのですが、それを削除して(10)としても言いたいことが伝わらないわけではありません。

以上で英訳する準備が整ったわけですが、ここでもう一つだけ確認しておきたいことがあります。それは、難しい日本語を易しい日本語に言い換えながら英訳する第1の手順は、「です・ます調」の文を「である調」の文に変えることだという点です。

これは一見すると馬鹿げた手順のように思われるかも知れませんが、実はそうではないのです。たとえば、「少年文庫版」では冒頭文に続けて話が次のように展

開されています。

(11) 村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。

この文で特に難しいのは、下線部です。中級の日本語能力をもつ留学生ですら、この言い回しは、日本語のどのようなニュアンスを表すのか、理解できないのではないのでしょうか。なぜなら、この「もの」は具体的な物を表しているわけではないからです。

しかし、このような細やかな日本語の陰影に当面は目をつむって、この丁寧体「です・ます調」を次のような普通体「である調」に書き改めてみたらどうでしょうか。

(12) 村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かった。子供は面白がって度々そうした。それで、あの子は嘘つきだということになった。

これで留学生には少しは意味の取りやすい日本語になったのではないのでしょうか。しかし、このように直してみても、まだ理解しがたいところが残っています。

というのは、「...したものですから」における下線部「もの」だけでなく、「...ことが分かった」「...ことになった」における「こと」も留学生には分かりにくい日本語だからです。

また「...てみると」の「みる」も、「見る」と違って、実際に眼で見るのとは違った意味を持つことが多いので、これも留学生には分かりやすいとは言えません。

ですから、複文を幾つかの単文に分解して、もっと単純な「である調」の文に書き改めることができれば、いっそう留学生に理解しやすい日本語になるはずで、つまりもっと英語にしやすい日本語になるわけです。

色々な工夫ができると思いますが、たとえば次のようになります。下の日本語には前の文と後の文との論理関係が明確になるように接続語(二重下線の語)を補っておきましたが、これを(14)と比べてみれば、いかに易しい日本語(英訳しやすい日本語)になっているかが分かってもらえると思います。

(13) 村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。(改作版)

(14) 村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。(少年文庫)

こうしてみると、複文を単文に分解しつつ、丁寧体「です・ます調」の日本語を普通体「である調」に書き改めるだけで、枝葉の細かなニュアンスを削ることができ、自然と「分かりやすい日本語」「英語にしやすい日本語」になることが多い、ということが分かるはずです。

では、この調子でイソップ寓話「嘘つきの子ども」を最後まで書き改めるとどうなるでしょうか。先の話の続きは次のようになっていました。

これを上に述べた手順で単文に変えると「改作版」のようになります。

(15) しばらくして狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。(改作版)

(16) しばらくして、狼がきたので、子供は、「来てください。狼だ。」と、叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。そこで狼は、安心して、楽に羊をみんな殺してしまいました。(少年文庫)

こうすれば、「中学初級の英語学力しかない」と英語に劣等感を持っていたひとでも、この「改作版」の日本語なら、何とか英語にできそうだと思うのではないのでしょうか。

ですから、何度も言うように、英語ができるようになるために先ず必要なのは、「日本語を日本語に言い換える力」であって「日本語を英語に変える力」ではないのです。この力がなければ、どれだけ単語・熟語を憶えても、それを使えるようにはなりません。

いま巷<sup>ちまた</sup>では、小学校からの英語教育が声高に叫ばれています。そして小学校から英語教育をしてこなかったから日本の英語教育は成果をあげることができなかったのだとも言われています。

しかし決してそうではありません。学習の仕方を変えれば成人でも会話ができるようになります。逆に、どれだけ小学校から英語教育をやっても母語の発達が貧弱である限り、その到達点は必ずや頭打ちになるでしょう。

それはともかく、頭の中に浮かんだ日本語(複文)をもっと易しい日本語(単文)に言い換えることができたとして、それをどうすれば英語にできるのでしょうか。

章を改めて、それを詳しく説明したいと思います。その過程で、別の種類の「日本語を日本語に言い換える力」が実は必要だということを、認識してもらいましょう。さあ頑張って次の章に挑戦しましょう。

## 第4章 日本人でも日本語を間違える、ましてや...

これまでの章では、英会話上達への秘訣は単語・熟語を暗記することではなく、難しい日本語（複文）を易しい日本語（単文）に言い換える力を身につけることだということを繰り返し述べてきました。これは一見、簡単なことのように見えますが、今までの作業を見ていただければお分かりのように、それほど簡単なことではありません。

というのは、単文にただけでは文章がスムーズに流れないので、前の文と後ろの文を論理的に結びつける接続語を補わなければならないからです。これは、元の「少年文庫版」と単文に書き換えた「改作版」を比較していただければ、すぐに納得してもらえなことだと思います。分かりやすいように、以下に両方を再録します。

< むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。(改作版)>

< 羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。子供は面白がって度々そうしたものですから、あの子は嘘つきだということになりました。しばらくして、狼がきたので、子供は、「来てください。狼だ。」と、叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。そこで狼は、安心して、楽に羊をみんな殺してしまいました。(少年文庫)>

このような「それで」「しかし」「だから」「そこで」などの接続語を専門用語では「Discourse Markers」と言います。「Discourse」は普通「談話」と訳されていますが、要するに「意味のあるひとまとまりの文

章・会話」のことです。文章・会話が意味を持つためには、文と文がどのように結びつけられているかを示す標識 (Marker) が必要です。そこで、これを「Discourse Markers」と呼んでいるわけです。

このような接続語をきちんと使い分けることが出来るためには、単に複文を単文に分解するだけでなく、文章の流れや文章に込められている意味を論理的にもう一度、分析し直してみなければなりません。

そして、このような訓練を続けていると、文章の論理的関係だけでなく、「言わなくてはならないこと」と「削除してもよいこと」が見えてきて、いざ英会話というときにも大きな力を発揮するのです。

それだけでなく、与えられた文章の「論理的ねじれ」や「日本語としてのおかしさ」が見えてくることもあります。こうして英会話をするときにも、自分の言いたいことを易しい言葉で明快に（論理的に）言える力がついてくるのです。

たとえば、先の「少年文庫版」も、よく見ると幾つか不自然さが目につきます。たとえば次の(1)も、よく考えると日本語として不自然です。というのは、日本語では、「村の人々は、・・・ということが分かりました。」という言い方は普通しないと思うからです。

(1) 村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。

では、どのような言い方をするのでしょうか。私の日本語の感覚では、述部「・・・ということが分かりました。」に対応する主部は「村の人々には」であって、「村の人々は」ではないように思うのです。つまり私には、(2)となるのが日本語としては自然だと思われるのです。

(2) 村の人々には、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。

(3) 駆けつけてみると、村の人々には、子供が嘘をついたということが分かりました。

しかし、この場合は(3)のように、「駆けつけてみると」を文頭に持ってくる方がもっと自然です。

他方、よく考えてみると、この「村の人々は」は、「・・・ということが分かりました。」の主部ではな

く、「駆けつけてみると」の主部であるとも考えられます。

(4) 村の人々は、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。(少年文庫版)

このように考えると、今度は「村の人々は」の助詞「は」の使い方が不自然に見えてくるのです。つまり、(5)のように、「村の人々が駆けつけてみると」のほうが日本語としては自然だと思われるからです。

(5) 村の人々が、駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。

そして、細かいことですが、「村の人々は」の後に付いていた句点「、」も不要になります。というよりも、句点「、」のあるほうがむしろ不自然です。また「子どもが嘘をついた」よりも「嘘をついていた」の方が私には自然に思われます。

(6) 村の人々が駆けつけてみると、子供が嘘をついたということが分かりました。

(6) 村の人々が駆けつけてみると、子供が嘘をついていたということが分かりました。

見てきたように、私たちの書く文章(複文)は、上記で詳しく分析したように、日本語として不自然なところを無意識のうちに含んでしまっていることが少なくないのです。

その例をあと一つだけ付け加えておくことにします。というのは、上記で紹介したのは単なる一つの小さな偶発的ミスでしかない、と思われるかも知れないからです。たとえば、少年文庫版で次のような文があります。

(6) 羊の番をしていた子供が、まるで狼が羊を食べに来たように、村の人たちを呼びました。「助けて。狼がきた。」・・・しばらくして、狼がきたので、子供は、「来てください。狼だ。」と、叫びましたが、誰もそれを信用して助けに駆けつける者はありませんでした。・・・

この文章も、下線部の「来てください」という丁寧形は、文章の流れとしては、いかにも不自然ではないでしょうか。というのは、全体の文体は「です・ます

調」ですが、羊飼いの子どもが村人を呼ぶとき、「助けて。狼がきた。」と叫んでいます。「助けてください。狼が来ました。」というような「です・ます調」で呼んでいるわけではありません。

そもそも、遠くにいる村人に助けを求めて叫んでいるわけですから、「助けてください。狼が来ました。」という丁寧体で呼びかけても、大きな声が出ず、村人には聞こえないでしょう。だからこそ、「助けて。狼がきた。」という「である調」になっているわけです。

といっても「助けて。狼だ。」の方が、本当は日本語として自然だと思います。というのは、「助けてくれ」ではなく、「助けて」だけにするのであれば、「狼がきた。」も「きた」を省略して「助けて。狼だ。」とする方が日本語として自然だと思うからです。あるいは「狼だ。助けて。」とする方が、もっと自然かもしれません。比較のために、下に例文を列挙してみます。

- (7) 助けてください。狼が来ました。
- (8) 助けてくれ。狼がきた。
- (9) 助けてくれ。狼だ。
- (10) 助けて。狼だ。
- (11) 助けて。狼がきた。(少年文庫版)
- (12) 狼だ。助けて。
- (13) 狼だ。助けてくれ。

こうしてみると、「助けて。狼がきた。」(少年文庫版)の例文が、全体の文体からすると、かなり不自然だということが分かってもらえると思います。

しかしそれよりも、もっと不自然なのが次の例文における「来てください。狼だ。」ではないでしょうか。

(14)・・・しばらくして、狼がきたので、子供は、「来てください。狼だ。」と、叫びましたが、・・・(少年文庫版) >

本物の狼が出てきたので必死に村人に叫んでいるとすれば、このような「来てください。」という丁寧で蚊細い調子になるはずがないと思うのです。しかも、この「来てください。」という丁寧体は、次の「狼だ。」という「...だ調」と全く不釣り合です。もし前後の調子を一貫させるのであれば、「来てください。狼です。」とすべきでしょう。

- (15) 来てください。狼です。
- (16) 来てください。狼だ。(少年文庫版)
- (17) 来てくれ。狼だ。

上記のように例文を比較して並べてみると、少年文

庫版の和訳が一番不自然であることは、誰の目にも明らかではないでしょうか。

また、このように考えてくると、日本人であるからといって日本語を正しく分かりやすく使っているわけではないことが分かります。岩波書店という一流の出版社から出されている翻訳ですら、このような現状なのです。だとすれば、私たちの書く英語は、少くとも英語として不自然であっても、全く気にする必要がないのではないのでしょうか。

要するに、一流出版社である岩波書店から翻訳・出版を頼まれるほどのひとでも、その書く日本語は必ずしも日本語として自然なものであるとは限らないのです。

だとすれば、私たち外国人が書く英語が少々不自然なのはむしろ当然なのではないのでしょうか。

しかし他方、既に前章で述べたように、少年文庫版を単文に書き改めた文章は以上のような不自然さを避けることができます。

また、それだけではなく、英訳するのも極めて容易です。文意も明快で、留学生にも読んで分かるものになっているからです。

つまり、このような単文を英訳することにしておけば、私たちの書く英語に間違いがあっても気にする必要がないとしても、間違いや不自然さを少しでも減らすことが出来るわけです。

しかし、次に問題になるのが、「複文を単文に言い換える力がついたが、その単文をどのようにして英語にするか」です。

そこで、いよいよ章を改めて、「どうすれば単文を簡単に英訳できるようになるのか」を説明することにしたいと思います。頑張って次章に挑戦してください。

## 第5章 英語の基本型を身につける

この章から、いよいよ「どうすれば単文を簡単に英語にできるのか」に入ります。教材は今までに取り上げてきたイソップ寓話「羊飼いの悪戯(いたずら)」です。前章までに、「少年文庫版」の文章を既に単文にしてしまっているのですから、それを英語にしてみようというわけです。先ず以下にそれを再録します。

さて、この文を順次、英訳しながら、単文を英語に

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白<sup>たびたび</sup>がって度々同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。

する手順・秘訣を説明していきます。その中で「英語とはどんな言語か」ということも明らかにできれば、と思っています。

まず冒頭文「むかし羊飼の子供がいた。」ですが、これを英語にするにはどうすればよいのでしょうか。個々の単語を知っていたら英語になるのでしょうか。

たとえば、上記の日本語に相当する英単語を知っていて、それを下記のように並べたら通じる英語になるのでしょうか。

[むかし] 羊飼の子供が (いた)。

[Once] shepherd's boy (was)

しかし残念ながら、このように日本語の語順のまま英単語を並べても通じる英語にはなりません。英語には日本語とは違った英語の語順があるからです。

もちろん「そこに誰がいたのですか」という質問に対して、「羊飼いの少年だよ」と答えたいのであれば、単に英単語を1個「shepherd's boy」と言えば済むのですが、これから何か話をする際の冒頭文としては意味を成さないのです。

では、どうすればよいのでしょうか。その最も重要な手順は英語の語順に単語を並べ替えることです。なぜなら、日本語とは違って、英語は語順が違っていると意味が通じなくなる言語だからです。これが英語の「最初にして最後の規則」だと言ってよいくらい重要なルールです。

たとえば日本語の場合、「太郎は寺島の本を読んでいる。」という文の語順を入れ替えて、「寺島の本を太郎は読んでいる。」と言っても、細かなニュアンスは別にして、言っていることの基本的意味にさほど違いがありません。

もっと大きく語順を入れ替えて、「寺島の本を読んでいる、太郎は。」と言っても、「太郎」が「寺島の本」を「読んでいる」という幹になる事実については、正しく相手に伝わります。しかし、英語では、語順を入れ替えると全く意味が通じなくなってしまうのです。

というのは、英語では「太郎・読む・寺島の本」という語順で単語を並べる規則があるからです。つまり「名詞・動詞・名詞」という語順で単語を並べるのです。そして、この「動詞」の前の名詞は「動作主」で、名詞の後ろの名詞は「動作の対象」を示すのが一般的なのです。

ですから、もし「寺島の本・読む・太郎」という語順で単語が並んでいたら、英語では「寺島の本が太郎を読む」という意味になってしまうのです。もちろん常識では、こんなことはあり得ないので、これは誤文だと判断されるわけです。

しかし日本語の場合、「寺島の本・読む・太郎」という語順で並んで言っても意味が通じるのは何故でしょうか。それは日本語の助詞の働きに依ります。つまり、「寺島の本を 読んでいる、太郎は。」という文では、「は」「を」という助詞が、「誰が」「何を」読んでいるのかを示す働きをしているのです。

ところが英語の場合は、このような助詞に当たるものはありません。では何が助詞の代わりをしているのでしょうか。それが「語順」なのです。「名詞・動詞・名詞」という語順で単語を並べ、「動詞」の前の名詞は「動作主」で、名詞の後ろの名詞は「動作の対象」を示すことにしているのです。

だから、「寺島の本・読む・太郎」という語順で単

語が並んでいたら、英語では「寺島の本が太郎を読む」という意味になってしまうのです。

Taro (is reading) the Terasima's book.  
太郎が 読んでいる 寺島の本を

The Terasima's book, (is reading) Taro  
寺島の本が 読んでいる 太郎を

そして、この「動作主」に当たる語を「主語」、「動作の対象」に当たる語を「目的語」と呼んでいることは、中学校で英文法を習ったことがある人なら、誰でも知っていることだと思います。

つまり英語の基本型は「主語・動詞・目的語」という語順なのですが、実は、このような文法用語が重要なのではなく、「名詞 (動詞) 名詞」という語順・基本型が重要なのです。そこで、この語順を仮に「セン (マル) セン」の語順と名付けておきましょう。

ちなみに、英語の基本型は「セン (マル) セン」だとすれば、日本語の基本型はどういうものでしょうか。それは、先に出てきた自然な日本語「太郎は寺島の本を読んでいる。」の語順を再点検してみると確認できます。すると日本語の基本型は「セン セン (マル)」だということが分かります。つまり動詞が必ず文末に来るのです。

さて以上のような基礎的ルールを身につけたとして、ではイソップの次の冒頭文はどうすれば英語として通じるものになるのでしょうか。(この日本文でも「いた」が文末に来ていることを確認してください。)

既に述べたように、英語の基本型は「セン (マル)

[むかし] 羊飼の子供が (いた)。  
[once] shepherd's boy (was)

セン」でした。だとすると、文末に「マル」が来ている上記の文を、この基本型になるように、語順を入れ替えてやらなければなりません。しかし「セン」に当たる語句は、「羊飼の子供」の1個しかありません。

というのは、「むかし」という時間を表す副詞句は、上記でも括弧に入れられていることから分かるように、「マル」の前後に位置する「セン」とは見なされません。そこで英語では「・・・がいた(あった)」

ということを表現する場合、thereという「形式語」を最初に置くことが多いのです。

[むかし] 形式語 (いた) 羊飼いの子供

[once] there (was) shepherd's boy

このthereは元々は「そこに」という場所を示す副詞なのですが、「がいた(あった)」ということ表現する場合、「マル」の前の「セン」に当たる語として、いつの間にか定着してしまいました。そして具体的に「どこにいたか」が分かっている場合、それを文末で示すことになってしまいました。

たとえば「昔ある村に一人の羊飼いの少年がいました。」は次のようになります。

[むかし] 形式語 (いた) 羊飼いの子供  
[ある村に]

[Once] There (was) shepherd's boy  
[in a village]

上記の英文は、このままで十分に通じる英語になります。しかし、厳密に言うと、文法的に正しいとされる英文は次のようになります。「羊飼いの少年」shepherd's boyの前に付けられた"a"という単語に注意してください。

[Once] there was a shepherd's boy [in a village]

このshepherd's boy「羊飼いの少年」の前に付けられた"a"という単語は文法用語では「冠詞」と呼ばれているものです。「羊飼いの少年」という名詞の頭にかぶせられた「冠<sup>かんむり</sup>」という意味でしょう。

実をいうと、冠詞には"a(an)"の他に"the"もあるのですが、これが付いていないと会話が通じないかというと、決してそんなことはありません。というのは、冠詞は弱く発音されるのが普通ですから、会話では冠詞が付いていても聞こえないことが少なくないからです。

ですから、何度も言っているように、文法的に全く誤りのない英語で話す必要はないのです。それどころ

か、最近の「言語習得論」の研究では、誤りの段階を経過しないで言語を習得することはあり得ない、ということが分かってきているのです。ですから自信を持って間違えればよいのです。

ところで、ここで不思議なことがひとつあります。それは「むかし」羊飼いの子どもがいた」を下記のよに英訳したら何故いけないのかということです。

[むかし] 羊飼いの子供 (いた) 形式語  
[ある村に]。

[once] shepherd's boy (was) there  
[in a village]

なぜなら、「セン (マル) セン」が英語の基本型であり、「マル」の前が普通は「主語(...が)」になるとすれば、この場合も、動詞「いた」の前に主語「羊飼いの子ども」が位置している方が英語の基本型に合っているように思われるからです。

この疑問は当然の疑問です。しかし実際の英語では、物語の出だしの部分「昔(ある所に)一人の...がいた」の英訳は、(a)のようにはならず、(b)のようになります。これは何故でしょうか。

- a. [むかし] 一人の羊飼いの子供 (いた)  
形式語
- b. [むかし] 形式語 (いた)  
一人の羊飼いの子供

これは多分、文章を書くとき、「旧情報」(以前に述べた<sup>ふる</sup>旧いこと、または皆に衆知のことだと思われていること)は前に、「新情報」(これから述べようとする新しいこと)は後に置くという基本原則に関係があるのではないかと思います。

つまり文章は、前の文の「旧情報+新情報」における「新情報」を、後の文では「旧情報」として受け止



めながら、ふつう下図のような連鎖を成して流れていくわけです。

文 1 : 旧情報 + 新情報

文 2 : 旧情報 + 新情報

文 3 : 旧情報 + 新情報

しかも英語の場合、「セン (マル) セン」が基本構造ですから、この構造と「旧情報 + 新情報」という文の構成法が一番うまく合致するのは下図のようになったときではないでしょうか。

「旧情報 (マル) 新情報」

では、「むかし(一人の)羊飼いの子どもがいた。」という文で、最も伝えたい「新情報」は何でしょうか。それはやはり「(一人の)羊飼いの子ども」ではないでしょうか。だとすると、次の図のようにな

さて問題は、この「旧情報」の空所に何を入れるかです。しかし、よく考えてみると、「むかし(一人の)羊飼いの子どもがいた。」という文には、子どもがどこにいたのか、その居場所が示されていません。それは多分、この物語にとって「場所」は重要ではなかったからだ、と思われる。

つまり「(むかし)ある所に」という程度に考えておけばよいのであって、それは一種の「衆知のこと」、つまり「旧情報」だと考えて良いわけです。そして、この「旧情報」=「(むかし)ある所に」を、英語では「衆知の場所」= there (そこ) で表現するようになった、というのが私の仮説です。

この仮説が正しいかどうかは、英語史を紐解いて検証してみないと分からないのですが、その正否はともかく、英語では「...がいる(ある)」を表現する場合、その存在するものが「新情報」の場合、「There (ある(いる)) 新情報」という語順になることだけは確実なのです。

ここまでくると、もう一つの疑問が湧いてきます。それは上記の「羊飼いの子ども」が旧情報の場合、英語ではどう表現するのかという問題です。つまり「羊飼いの子ども」が既に話題として登場していて、「その子ども」が「どこその場所にいた」という場合に、

英語でどう書くかということです。

これは今までの説明から当然に予想されることですが、「その子ども」は「旧情報」ですから、下記のようにになります。

その羊飼いの子供 (いた) 形式語

[その村に]

The shepherd's boy (was) there [in the village]

しかし上記の場合、「形式語」there (そこに)は、「その村に」という具体的な指示語が明示されていますので、ここでは不要になります。つまり下記のようにになります。

その羊飼いの子供 (いた) [その村に]

The shepherd's boy (was) [in the village]

上記の“the”という語は、先に紹介した“a(an)”と同じく「冠詞」と呼ばれています。そして、これらを区別するために、“the”を「定冠詞」、「a(an)”を「不定冠詞」と呼んでいます。

しかし、意味の「幹」を伝える上では重要ではないので、今のところ憶える必要はありません。それよりも重要なのは、英語の基本型「セン (マル) セン」をきちんと頭に入れておくことです。この基本型さえ正しければ、通じる英語になるのです。

では、この基本型を使って、次の第2文「いつも次のような悪さをした。」を、どう英訳すればよいのでしょうか。章を改めて、それを次に説明したいと思います。少し疲れてきたかも知れませんが、コーヒーでも飲んで休憩をしながら、くじけずに付いてきてください。

## 6章 日本語力が英語力を決める

前章では英語の基本型が「セン (マル) セン」であることを学びました。また、この基本型から、どのようにして「There (ある(いる)) ABC」という文が生まれるのかを示しました。

そこで、この章では、英語の基本型が「セン (マル) セン」であることを、引き続き次の英訳に挑戦することによって、もう一度、確かめてみることにします。

英訳の対象となっているイソップ物語(改作版)は次のようなものでした。

むかし羊飼いの子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。でも子供は面白がって度々<sup>たびたび</sup>同じ嘘をついた。それで村人はその子どもを嘘つきだと考えた。しばらくして狼がきた。それで子供は「来てくれ。狼だ。」と叫んだ。しかし誰もそれを信用しなかった。だから誰も駆けつけなかった。そこで狼は安心した。そして楽々と羊をみんな殺してしまった。

さて、「むかし羊飼いの子供がいた。」の英訳は既に終わっていますので、次の対象は「いつも次のような悪さをした。」という文です。この和文の各々に対応する英訳は次のとおりです。

[いつも] 次のような悪さを (した)。  
[always] the following trick (played)  
< trick : 悪さ、悪戯<sup>いたずら</sup>、計略、トリック >

これを英語の基本型「セン (マル) セン」に変換しなければならないのですが、しかし、ここで困ったことが一つあります。それは「マル」の前後に「セン」を置こうにも、「セン」が一つしかないからです。ではどうすればよいのでしょうか。

既に前章で調べたように、「セン (マル) セン」は、意味上から言うと、「動作主 (動詞) 動作の対象」が基本的な意味でした。そこで、もう一度、「いつも次のような悪さをした。」という文を調べてみます。さ

て、この下線部は「動作主」でしょうか。それとも「動作の対象」でしょうか。

その答えは明らかです。というのは、日本語では、助詞「を」は「動作の対象」を表し、助詞「が(は)」は「動作主」を表すのが普通だからです。つまり、「次のような悪さ」が「マル」の後の「セン」になるわけです。では「動作主」つまり「(悪さを)した」のは誰でしょうか。もちろん、それは「羊飼いの子ども」です。以上のことを図示すると次のようになります。

[いつも] その羊飼いの子ども (した)  
次のような悪さ  
[always] the shepherd's boy (played)  
the following trick

このように、日本語では、文脈で分かっている「動作主」=「主語」は、省略するのが普通なのです。その証拠に、上記の話の続きを見てください。下線部の「動作主」=「主語」が全く表現されていないにもかかわらず、日本語として不自然さだと、誰も思わないのではないのでしょうか。「主語」をいちいち書いたりすると、むしろ不自然な日本語になるでしょう。

ところが英語では特別な場合を除いて絶対に主語を

むかし羊飼いの子供がいた。いつも次のような悪さをした。「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。村人は駆けつけた。そして子供の嘘を知った。・・・

省略することはありません。省略すると通じない英語になってしまいます。なぜなら英語の基本型「セン (マル) セン」は絶対に崩すことのできない原則だからです。そこで上記のように「主語」として「(その)羊飼いの少年」を補わなければならないのです。

しかし、ここでもう一つ問題が出てきます。という

その羊飼いの子ども (した) 次のような悪さ  
[いつも]

のは、日本語では文脈で分かっている既知の情報(旧情報)をいちいち表現しないのと同じように、実は英米人も旧情報をいちいち表現するのを煩わしく感じています。そこで毎回、「その羊飼いの子ども」と書か

なくてもよい方法を考え出しました。それは「その羊飼いの子ども」という名詞の代わりになる簡便な語 = 「彼」を使う方法です。

形式語 (いた) 羊飼いの子供 [むかし]

新情報

旧情報

その羊飼いの子ども = 彼

(した) 次のような悪さ

[いつも]

このような「名詞の代用語」を「代名詞」というのですが、上記の場合、男を指すので「彼」と言い、英語では「he」という語で表し、他方、女の場合は「彼女」と言い、「she」で表します。これらは一般に人間を指すことが多いので、まとめて「人称代名詞」と呼んでいます。人称代名詞には人間以外を指す言葉 (it) もあるのですが、ここでは説明を省略します。あとで詳しく説明する機会があると思います。

さて、こうして「その羊飼いの子ども」を「彼」に置き換えて、英単語を「セン (マル) セン」の語順に並べると下記ようになります。ただし、「時間」を表す語句は、英語では文頭または文末に来ることが多いので、ここでは「セン (マル) セン」の構造が分かりやすくなるように、文頭に置いてあります。

以上で十分に通じる英語になったのですが、英語で

[むかし] 形式語 (いた) 羊飼いの子供

[once] there (was) a shepherd's boy

は「いつも」「しばしば」「ときどき」「滅多に」「決して」という副詞 (= 「頻度<sup>ひんど</sup>の副詞」) は、不思議なことに他のものとは違って、動詞の前に来るという変

わった習性を持っています。たとえば次の例文を見てください。

He always tells a lie. 「彼はいつも嘘をつく」

He often tells a lie. 「彼はしばしば嘘をつく」

He sometimes tells a lie. 「彼はときどき嘘をつく」

He seldom tells a lie. 「彼は滅多に嘘をつかない」

ですから「彼はいつも次のような悪さをした」は “He always played the following trick.” のように書くのが正しいのですが、だからといって、この always を文頭または文末に持ってきた文は、相手に通じないかといったら、決してそうではありません。特に会話では順次に音声は消えていくので、動作の頻度が「いつものこと」だったという印象だけが残って、文法のおかしさは瞬時に消えてしまいます。

それどころか、最近の「言語習得研究」によれば、英米人でも最初は頻度の副詞の位置を間違えながら言語を習得していくのです。間違いの段階を経ずに一挙に正しい文法を身につけるひとはいないというのが、最近の言語習得研究の成果なのです。ですから、何でも言うように、英語の基本型「セン (マル) セン」さえ正しければ、とにかく相手に通じる英語になるのです。

ところで私は先に、「特別な場合を除き、英語の基本型は “セン (マル) セン” だ」と述べました。では、その特別な場合とは何でしょうか。それが「いつも次のような悪さをした。」に続く次の例文です。

「助けて。狼がきた。」と村人を呼ぶのだ。

この「助けて」という呼びかけは、「助けてくれ」の短縮形で、ふつつ「命令文」と呼ばれています。名前は「命令」ですが、内容は相手に自分を助けてくれるよう頼んでいるのです。つまり下記のような文を「頼み」「依頼」にしたものと考えて良いわけです。

あなた (助ける) 私

You (help) me

では、この文を「命令」「頼み」「依頼」の文にするにはどうすればよいのでしょうか。英語では、この基本型「セン(マール)セン」の主語 You を省くことによって「命令」を表すことにしているのです。つまり“Help me.”だけで「助けてくれ」という意味になるのです。

しかし「(どうぞ)助けてください」と丁寧に頼みたいときは、その前後に please という語を付け加えることになっています。この please は上記の「どうぞ」「どうか」に当たる言葉です。つまり次のようになります。いずれにしても、ここで重要なのは「命令文」の原型は「セン(マール)セン」だということです。」

このように「命令文」の原型は「セン(マール)セン」

“Help me, please!”

“Please, help me!”

なのですが、「助けて」と叫んでいるときは、動詞の前の You だけでなく、動詞の後の me も省略することができます。なぜなら日本語でも単に「助けて！」という場合は、助けて欲しいのは「私(me)」に決まっているからです。要するに「助けて！」は“Help!”だけでもよいということです。

さて次の課題は「狼が来た。」の英訳です。しかし、これは簡単な解決方法があります。それは「助けて。狼が来た。」を「助けて。狼だ。」として英訳する方法です。

「助けて」が「助けてくれ」の省略形で、英訳“Help!”で済むとすれば、「狼が来た。」を「狼だ！」と考え、それを“Wolf!”と英訳しても良いと思われるからです。

それどころか、村人に大声で助けを求めるのであれば、単純に「助けて。狼だ。」と叫ぶのが普通であって、「狼が来た。」というような主語・述語がきちんとそろった文は、かえって不自然ではないでしょうか。

もし「狼が来た。」というような主語・述語がきちんとそろった文で言うのであれば、「助けて。」も短縮形ではなく、「助けてくれ。」とする方が、文体として統一性があるように思えます。

もっと細かなことを言えば、私が子どもだったら、「狼だ！」と先ず叫び、それから「助けて！」と言うように思うのです。この方が日本語としては自然ですし、それどころか、この少年は“Wolf! Wolf!”と何度も叫んだのではないのでしょうか。

そもそも英訳したい日本語(複文)を易しい日本語(単文)にしたのは、明快で平明な英訳にする練習をするためでしたから、このように「助けてくれ」「助けて」、「狼が来た」「狼だ」に換えて英訳することができるようになれば、私たちはもっと簡単に英語が話せるようになるのではないのでしょうか。頭に浮かんだことを、そのままのかたちで英語にしようと思うから、英語で話せなくなるのです。

さて、「狼だ！助けて！」を“Wolf! Wolf! Help me!”と訳すことができたとして、では次のまとまった文“狼だ！助けて！”と村人を呼ぶのだ。」は、どのように英訳すればよいのでしょうか。

狼だ！助けて！  
Wolf! Wolf! Help me!

「狼だ！助けて！」と村人を呼ぶのだ。

これを例によって英語の基本型「セン(マール)セン」に転換するとすれば、どうなるのでしょうか。それには先ず、日本語の習慣によって省略されている主語、すなわち「呼ぶ」の動作主を補わなければなりません。すると次のようになります。

その羊飼いの子ども (呼ぶ) 村人、

「狼だ。助けて。」

しかし既に述べたように、この「羊飼いの子ども」は旧情報だからこそ日本語では省略されていた。そして英語では旧情報の主語が人間の場合、それを「人称代名詞」で表現することは、前章で述べたとおりです。すなわち次のようになります。

彼 (呼ぶ) 村人、 「狼だ。助けて。」

He (call) the villagers: “Wolf! Wolf! Help me!”

ただし、ここで注意しなければならないことがあります。それは、この物語全体が過去形で進んでいるという点です。したがって、日本語では下記のように「呼

ぶのだ」は現在形になっているかもしれませんが、英語では過去形にする必要があるのです。

むかし羊飼の子供がいた。いつも次のような悪さをした。

「狼だ。助けて。」と村人を呼ぶのだ。

He (called) the villagers :

“Wolf! Wolf! Help me!”

しかし、ここで一つ疑問が出るかも知れません。それは「英語の基本型に単語を並べれば通じる英語になることは分かったが、下記の空欄にどのような英単語を埋めればよいのかが分からないとき、どうするのか」という疑問です。特に「悪さをする」を“play a trick”と表現する力は誰でも持っているわけではないので、この疑問は当然といえば当然の疑問です。

[いつも] 彼 (した) 次のような悪さ

[Always] he (played) this tick

しかし、本書の目的は英単語さえ与えられれば、英語は簡単に書けるようになるということを体験してもらうことにあります。

このことは一見、馬鹿げた提案のように聞こえるかも知れません。しかし、私の教えている大学生の英作文を読んでいると、単語が並んでいても意味不明の英文が少なくないのです。これでは英会話ができるようにならないのは当然だと思うのです。

彼らの英文が意味不明になる原因はどこにあるのでしょうか。それは英語の基本型「セン (マル) セン」から外れた英文を書いているからです。しかも頭に浮かんだ日本語(複文)をそのまま英語にしているので、なおさら意味不明の文章になっているのです。

私の教えている英語教育講座の学生、「将来の英語教師」ですら、状況は余り変わらないのです。このよ

うな体験を通じて私は次のことが大切だと思うようになったのです。

1) 頭に浮かんだ日本語は、そのままでは英語にしない。

2) 浮かんだ日本語(複文)を、なるべく明快で易しい日本語(単文)に言い換えてから英文にする。

3) 単文と単文のつながりも、単なる羅列ではなく、「つなぎ語」を重視し、論理的で筋の通ったものにする。

4) 単文に言い換えた日本語は、英語の基本型「セン (マル) セン」で表現できないかを<sup>ま</sup>先ず考える。

5) そのために、日本語の基本型「セン セン (マル)」を英語の基本型に並べ替えることを優先する。いきなり英語にしない。

要するに、「日本語を日本語に言い換える」作業が重要なのです。「複文 単文」「日本語の語順 英語の語順」という作業を日本語で出来るようになれば、英訳つまり英会話は半分以上は終わったのと同じになるのです。逆に、これが出来ないといつまで経っても書く英語は意味不明のままに低迷することになり、いつまで経っても英会話が出来ようにならないのです。

何度も言いますが、どれだけ英単語を知っていても、並べ方を間違えれば通じない英語になります。逆に英単語の使い方が間違っても、語順・文順が正しければ通じる英語になるのです。問題は「日本語力」をどれだけ持っているかにかかっています。だからこそ本書では、「日本語を日本語に言い換える能力」をどうすれば育てられるか、それを重視しているのです。

もちろん語彙力を付けることも重要です。しかし、それは単語・熟語を丸暗記しても決して役に立つ知識にはなりません。ではどうすれば役に立つ語彙が蓄積されていくのか。それについては、あとでゆっくり説明する機会があると思います。取りあえず今は、このイソップの翻訳を先に進めることが重要です。そうすれば、また新しいことが見えてくるはず。頑張りましょう。